

子どもに対する心理アセスメント

第1講 アセスメント概論と倫理

第2講 発達検査とその導入と結果のフィードバック

井上雅彦

鳥取大学大学院医学系研究科

アセスメントの意義

- 臨床的介入や教育を航海にたとえれば、地図や羅針盤や気象情報がアセスメントに、また互いに船同士が連携したりいざというとき助けを求めたりできる無線機はケース会議のようなもの
- アセスメントの重要性は、個人の臨床経験や仮説モデルを軽視するということではなく、実践知を、より活用するためのツールであり、実際の実践活動の中でその価値が問われるものである。
- 情報があっても舵を取るのは人である。舵取り具合は実際の様子によって細かく修正され調整されなければならない。

アセスメントを総合的に使用する

- 各々のアセスメントの情報は、一般的基準値に比して、個人能力や個人内差、個人の過去と現在など、様々な観点から比較・分類・記述・解釈するものである。
- 個人の総合的な理解のためには複数の異なった視点からのアセスメント情報を総合して検討することが必要となる。

アセスメントの適用

- アセスメントに用いる検査の条件としては信頼性、妥当性、弁別性、客観性、実用性がある。
 - 信頼性
 - 同一の個人に同じテストを繰り返したとき、同一の得点の得られる程度
 - 妥当性
 - テストがその測定しようとしている対象をどの程度測定し得ているかを表す。ある特定の認知能力を測定したいときには、それ専用のものが求められる
 - 弁別性
 - 客観性
 - 実用性

アセスメントの特性

- 様々なテストやアセスメントはそれぞれ目的を持って作られている。
 - 診断や判定のための情報を提供するもの
 - 現前の問題に対応するための情報を提供するもの
 - それらの両方を併せ持つもの
- それぞれのテストの特性を理解し、CIの主訴やニーズ、状態に応じて使い分けること
- CIの状態に応じて優先順位の高い情報や得やすい情報から収集することが望ましい。

アセスメントの範囲と種類

- 本人に関して
 - プロフィール情報(生育歴・診断投薬歴・家族・興味関心等)
 - 発達の情報(知能・言語・社会性・運動等)
 - ライフスタイル情報(生活圏・生活リズム・余暇等)
 - 行動記録(社会的相互交渉・問題行動等)
- 生態学的調査(環境アセスメント)
 - 家族・学校・地域資源など

アセスメントに必要な技能

- アセスメントはテスト(課題実施)形式のもの、行動観察によるもの、面接による聞き取りによるもの、記入式のもの等がある
- これらの特性を理解し、スキルをバランスよく身につけることが必要
- 今回の講義のみですべての査定法に習熟することはできません。修士2年間に加えて、個々の研修会、定期的なバイズを得ながら研鑽していく必要があります。
 - テストの実施に関する基礎技能(本講義前期)
 - 実施と解釈(本講義後期)
 - 情報収集面接の技能(基礎実習にて)

テストの実施に関する技能

- それぞれの検査の特性についての知識
- 対象に応じた検査やテストの選択技能
- 子どもに応じた実施技能
- 分析・解釈技能
- 伝達・情報共有技能

アセスメントの倫理

- 本人や保護者に実施の目的(当事者にとっての利益)、方法(時間的・経済的負荷)、結果や守秘についてのインフォームド・コンセントが必要。
- 本人についても、可能な限りわかりやすく説明することが検査への協力や不安の低減や役立つ。
- 守秘義務については、情報の管理方法はもちろんそれぞれの情報ごとにどの機関やどこまでのメンバーで共有するか決定し、本人・保護者に情報共有のメリットを説明し許可を得て連携に生かしていくようにする。

アセスメントに関するインフォームドコンセント

- アセスメントは何のためにするのか
- 本人家族にとってどのような利益があるのか
- どのようなものをどれくらいのコストで(時間・エネルギー・費用など)行うのか
- アセスメント情報の共有と守秘義務についての等の説明を行う。

(演習1)

- 親に対するインフォームドコンセントの練習をしてみましょう
 - 事例1 6歳2ヶ月 男児
 - 主訴 幼稚園の集団になじめない。
 - 3歳児検診で言葉の遅れを指摘されるが、その後発話も増加し、特に相談機関には通っていない。園では指示に従えない、じっとしていられない、友人とのトラブルなどがみられ、就学前に園から勧められて来談
- 生育歴を聴取し、発達検査を行う場合

発達関係検査

- 記述式検査
 - 乳幼児の日常生活全般を観察している人や保護者から報告を受け、それを整理して精神発達の様子を知らうとする検査。
- 記述式発達検査
 - KIDS(Kinder Infant Development Scale)
 - 津守式乳幼児精神発達質問紙
- 記述式生活能力検査
 - SM社会生活能力検査
- 実施式発達検査
 - 遠城寺式乳幼児分析的発達検査法
 - 新版K式発達検査

KIDS(キッズ)乳幼児発達スケール

- 適用0才～6才
- 1.運動:体全体の大きな動き
- 2.操作:手指などの意図的な動き
- 3.理解言語:言葉の理解
- 4.表出言語:話すことのできる言葉
- 5.概念:状況依存によらない言語的理解
- 6.対子ども社会性:友だちとの協調行動
- 7.対成人社会性:大人との関係、特に親子関係
- 8.しつけ:社会生活における基本的なルール
- 9.食事:衛生感覚や食事の基本的なルール



津守式乳幼児精神発達質問紙

- 適用0才～7才
- 1.運動
- 2.探索・操作
- 3.社会
- 4.食事・排泄・生活習慣
- 5.理解・言語



新版S-M社会生活能力検査

- 適用 乳幼児～中学生
- Vineland社会的成熟尺度(Vineland Social Maturity Scale)を基に三木(1959)が作成、現在はその改訂版
- 社会生活に関する能力を6領域に分け、発達度を測定する。



- 社会生活能力の構成領域については、下記の6領域を設定。
- 1、**身辺自立** 衣服の着脱、食事、排泄などの身辺自立に関する生活能力。
- 2、**移動** 自分の行きたい所へ移動するための生活行動能力。
- 3、**作業** 道具の扱いなどの作業遂行に関する生活能力。
- 4、**意志交換意志交換** ことばや文字などによるコミュニケーション能力。
- 5、**集団参加** 社会生活への参加の具合を示す生活行動能力。
- 6、**自己統制** わかまをを抑え、自己の行動を責任を持って目的に方向づける能力。
- この検査では、社会生活年齢や社会生活指数、すなわち子どもが現在身につけている実生活の処理能力の程度をしめす。

遠城寺式乳幼児分析的発達検査

- 移動運動、手の運動、言語、情緒、知的発達、社会的発達の機能を分析的に評価。
- 0才～4才7ヶ月



新版K式発達検査

- ①姿勢運動
- ②認知適応
- ③言語社会の3領域に大別され、各領域と全領域について子どもの到達している発達年令段階を測定する
- 新生児～14歳過ぎ

発達検査結果のフィードバックの流れと留意点

- 発達の状態をプロフィールを示しながら説明
- 問題となる点について説明
- 経過観察、次回の検査、適切な援助機関の紹介
 - 乳幼児の発達は変動可能性が大きく、質問紙の場合応答者によるバイアスもある
 - 1回の検査結果から発達状態を確定しない
- 生活の中で実現可能な方針を助言

(演習2)

- 前回の復習として検査のインフォームドコンセントについてロールプレイを実施してみましょう
- 別紙のKIDSプロフィールによって保護者に対するフィードバックの練習をしてみましょう
 - 事例 2歳5ヶ月男児
 - 主訴 ことばの遅れ。障害があるのではないかと不安である。家庭で配慮する点について教えてほしい。
 - 簡単な模倣は可能、発声はあるが発語がほとんどない、運動発達は全体的に遅めで、座位が8ヶ月、始歩が20ヶ月であった。

HW(締め切りは連休明けの授業)

- 知り合いに協力者を頼み、KIDSを実施してみてください
- インフォームド・コンセント(演習用として)を忘れずに
- 年齢、性別、プロフィール表、各領域ごと及び全体の発達年齢、発達指数(DQ)を算出してレポートしてください